近代熊本とキリスト教（5）

熊本洋学校後の近代学校教育（Ⅱ）

藤本　誠

三　大江義塾と塾長・徳富猪一郎による泰西自由主義

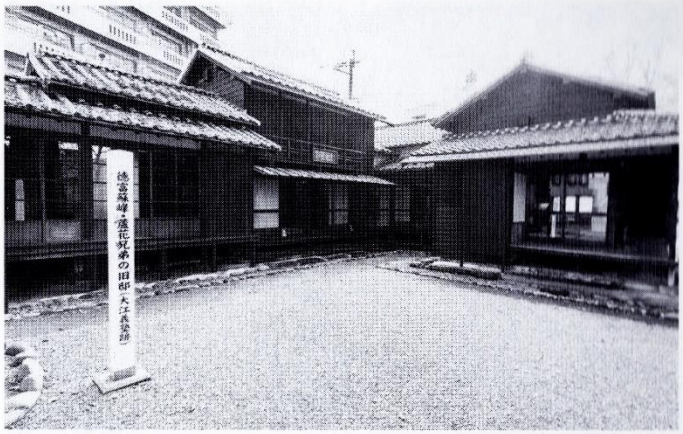
徳富猪一郎（蘇峰）は自伝で、「十年の役」（西南戦争）後、二箇の学校が出来たと記している。一つは旧学校党の「同心学舎」で、「一を共立学舎といい、それは山田武甫や宮川房之（注・小楠門下四天王の一人）及び予の父（注・徳富一敬）等の発起したるものにて、予の父はほとんど予の帰郷する頃までは、全力をこの学校に注いでいた」[2]という。当時の熊本は、三党が鼎立していた。「同心学舎を基礎としたる旧学校党。共立学舎及び広取校を基礎としたる実学党。及び相愛社である。学校党が保守党であり、実学党が漸進党であり、相愛社が急進党であった」[2]。

京都同志社を中退し東京にいた徳富猪一郎（蘇峰）は、明治一三年一〇月帰熊し、民権結社「相愛社」[3]（忘吾会）に加わった。「伝統的に実学派であらねばならぬ」[2]猪一郎は、「父とともに共立学舎に赴き、あるいは討論等に従事した」[2]。また、共立学舎で父・一敬を手伝う一方で、「相愛社の連中の誘うに任せ、演説のために田舎廻りをなし始めた」[4]。明治一四年七月一日、相愛社から機関紙『東肥新報』が創刊されると、猪一郎は「誘わるるままに当初より無報酬にて、その編集を手伝う事となった」[5]。社説や論説も担当して書き、種々の翻訳ものをも出した。「翻訳したのは、マコーレーのエッセー、もしくはクロムウェルの伝などであった」[5]。

明治一四年九月一日、学校党を中心にした紫溟会が結成されると、これに対抗して、「いままで相たずさえていた横井実学党と相愛社も合体」[6]し、一五年二月九日に公議政党を結成した。「公議政党は、さらに九州自由主義者を団結して、一か月後の三月

一一日に九州改進党を結成し、中央の自由党と連絡して、九州の自由民権運動の拠点となった」[6]。こうして紫溟会と九州改進党との対立抗争の構図の中で、済々黌開校一ヵ月後の明治一五年三月一九日、済々黌に対抗するように、大江義塾が熊本県託麻郡大江村八〇番地（現・熊本市大江四丁目一〇番三三号）に開校したのである。

猪一郎には、帰熊当初から自らの手で学校を興したいという思いがあった。自伝の「大江義塾の設立」でこう述べている。



大江義塾跡（現・熊本市中央区大江３丁目1-3）

「予は同志社に足掛け五年間いる中に、教育に就いて多大の興味を感じ、自分が教育者となる日には、この事はかくせねばならぬ、かの事はかくせねばならぬと、種々自ら注文をつけていた。／また共立学舎にしばしば出席して、その模様を見ても、何となく歯がゆいような感がした。それで予は何とか自ら学校を起こして見度いというような感が、帰郷そうそう湧いて来た。」[7]

徳富家の財政を立て直すということもあったようだが、猪一郎の胸中には教育によって自由民権思想の普及浸透を図りたいとの思いがあった。泰西自由主義に立脚した民権私塾を目指したのである。「大江義塾沿革一斑」[8]（明治一八年末か）には、次のように記されている。

「…天下有志ノ教示依ラズ政党ノ力ニ依ラズ天下公衆ノ力ニ依ラズ、純然タル泰西自由主義ニ基キ自由主義ノ教育ヲ用ヒ東洋流ノ卑屈保守退歩囲範中ノ学問ノ主義ヲ捨テ、又専ラ泰西的ニ赴クナク、茲ニ其ノ教育ヤ邦語ヲ以テシ其ノ足ラザル所ヲ洋書ニ仮リ、茲ニ則チ一個ノ新ナル日本学問ノ新機軸ヲ

大江義塾の教場（撮影許可済）
教卓や文机は徳富猪一郎（蘇峰）や徳富健次郎（蘆花）が使用していた現物

現出セリ。夫レ已ニ自由主義ノ学校ナリ、故ニ其ノ制度ヤ境遇ヤ純乎タル自由ニシテ生徒ノ自治ニ任セ、自カラ一校舎中一ケノ民主国ヲ造ルニ至レリ。…」

しかしこうした大江義塾の教育方針が、紫溟会勢力の強い熊本の土壌に受け容れられることは難しく、四面楚歌の状況に置かれていたと言ってよい。明治一五年三月八日付けで熊本県令富岡敬明宛に「私立変則中学校設置伺書（私立義塾設立伺書）」を提出しているが、「伺書」に対する許可はなかなか下りなかった。[9] 文部省も大江義塾の教育方針や学科課程に注文をつけている。文部省から熊本県令富岡敬明宛の通達文書「普学第二百七十五号」[10]（明治一六年二月一六日付け）に次のように記されている。

「…大江義塾学科課程中欧州文明史アリテ其教科要書中ニハ代議政体史トアリ彼此符号セス右ハ如何ノ都合ニ候哉致様知度尤代議政体史文明史等ノ如キハ右等普通ノ学校ニ於テ教授スヘキ性質ノモノニ無之ニ付削除セシメラレ可然且修身科ニ西国立志編西洋品行論ノ二書採用有之候処右ハ儒教主義ニ基キタル書籍ト交換セシメラレ可然…（傍点・筆者藤本）」

代議政体史や文明史等は普通学校の教科としては適切でないとして削除を求め、修身科の西国立志編や西洋品行論も儒教主義に基づいた書籍に交換するよう求めている。言うまでもなく『西国立志編』・『西洋品行論』[11]は、サミュエル・スマイルズの著書を中村正直（敬宇）が翻訳した啓蒙書で、イギリスのブルジョア的勤勉立志や人間の品性を高める品行の善良について説き、福沢諭吉の『学問のすゝめ』などと共に、儒教主義道徳に代わる西洋のキリスト教的道徳を教示してくれる書物として、明治期の青少年から絶大な支持を得たものであった。

明治一八年の「私立大江義塾規則改正伺書」[12]に見られる学科課程は文部省の勧告もあり、本科課程の修身は『孟子』（一年）、『論語』（二年）、『大学』『中庸』（三年）の四書を中心にしているが、スペンサーの『道徳之原理』[13]（三年）もあり、泰西自由主義道徳も取り込もうとしている。明治一九年の学科課程表[14]では、修身の五級に『西国立志編』、五～三級に『西洋品行論』が採用され、吉田松陰の『幽室文稿』が加わっており、大江義塾の泰西的道徳の再強化が窺える。『西洋品行論』・『幽室文稿』は、塾生の読書会にもテキストとして使われた。[15] 他の学科では、ミル『代議政体論』、バジョット『英国憲法論』、スペンサー『制度論』・『教育論』、ギゾー『欧州文明史』、ゼボン『論理学』などが見られるが、特に猪一郎（蘇峰）の思想に決定的な影響を与えたイギリスの歴史家マコーレーの『英国史』・『英国憲法史評論』・『ミ

大江義塾解散式に際して大江義塾塾生一同(18)（明治19年11月、最後列右から8人目：蘇峰）

ルトン論』などが使われている。

塾長・猪一郎による泰西自由主義の鼓吹によって、塾生たちは自主的自治の精神を育み、民権思想を醸成していった。開校後まもなく『大江義塾雑誌』(16)を創刊し、塾生たちは自治組織によって運営した。また、演説会、読書会、遠足、撃剣会、試胆会、詩会、体術稽古などの課外活動も盛んに行われた。(17) 大江義塾は国権主義・済々黌の精神風土の強い熊本の地で、自由民権運動の改革の一翼を担っていたが、その対立構図の中で抗しきれず、一八八六（明治一九）年九月廃校となった。

猪一郎は同年一〇月に『将来之日本』を東京で刊行し、一二月には父・一敬夫婦とともに一家を挙げて上京した。行動を共にする弟子たちを伴って、東京で雄飛せんと熊本を発ったのである。翌明治二〇年二月民友社を設立し、雑誌『国民之友』を創刊。徳富蘇峰と号し、明治二三年二月には『国民新聞』を創刊した。

（ふじもと　まこと／九州学院一〇〇周年記念歴史資料・情報センター長）

【注】

（1）広取学校に一年後れて明治一二年一二月認可を得、熊本市坪井上林町五三番地に学舎を設立。六年後の明治一八年三月

閉校。花立三郎『大江義塾―一民権私塾の教育と思想』（昭和五七年五月一日発行、ぺりかん社）の注（4）二〇～二二頁より。

（2）徳富猪一郎『蘇峰自伝』（一九三五年発行、中央公論社）の「熊本における学派の鼎立」より。引用は『日本人の自伝5』（一九八二年一〇月八日発行、平凡社）所収の「蘇峰自伝」より。

（3）植木学校・霽月社・協同隊の系譜をひく旧民権党士族層を中心として、一八七八（明治一一）年五月結成された自由民権結社。

（4）（2）の『日本人の自伝5』・「蘇峰自伝」九五～九六頁。

（5）同右九七頁。

（6）（1）の花立三郎『大江義塾』一七頁。

（7）（2）の「蘇峰自伝」九九頁。

（8）花立三郎・杉井六郎・和田守編『同志社大江義塾　徳富蘇峰資料集』（一九七八年一〇月三一日発行、三一書房）三二一頁。

（9）「伺書」に対する許可が下りないまま、「猪一郎は弟健次郎（注・徳冨蘆花）、縁者の徳永規矩、松枝弥一郎の三人を相手に、三月十五日授業を開始し、四日後の十九日に大江義塾の開校式をあげた。」（（1）の『大江義塾』二五頁。）

（10）（1）の花立三郎『大江義塾』三〇～三一頁。この通達文書は、普通学務局長文部大書記官・辻新次から熊本県令富岡敬明に宛てたものである。

（11）『西国立志編』（『自助論』）は、サミュエル・スマイルズ（SAMUEL SMILES）の『SELF-HELP』（一八六七年増訂版＝中村正直がイギリスから帰国するときもらった書）を中村正直（敬宇）が明治四年に訳出出版したもの。『西洋品行論』は、同じく正直が『CHARACTER』（一八七一年刊行）を明治一三年に全編訳出刊行したもの。九州学院初代院長・遠山参良の「蔵書遺本」の中にもこの二冊の洋書があり、明治期の必読啓蒙書となっていた。

（12）（8）の三三八～三四三頁。徳富記念館には寄託された「大江義塾規則」（明治一八年一月改正）が展示されている。

（13）スペンサー（Hebert Spencer,1820～1903）の『道徳之原理』（Principles of Ethics）で、〝綜合哲学〟の第五部として出版されたもの。第一巻が一八七九年に出版されている。（田中啓介編『熊本英学史』・花立三郎「第三部第二章　大江義塾」一九九～二〇六頁）なお邦訳は、斯辺鎖（スペンセル）斯辺鎖著、山口松五郎訳『道徳之原理』（明治一六年七月刊）として出版されている。

（14）（1）の一一一～一一四頁。

（15）（1）の一五八～一六〇頁。および花立三郎『徳富蘇峰と大江義塾』（昭和五七年一〇月一日発行、ぺりかん社）「Ⅰ　六、大江義塾時代の読書」三一頁、「Ⅱ　四、『雑誌』に掲載された認証の題目の分析」六七～七二頁より。

（16）（15）の花立三郎『徳富蘇峰と大江義塾』「Ⅱ大江義塾雑誌――民権を叫ぶ明治青年の声」参照。

（17）（1）の一五三～一七二頁。

（18）集合写真は（2）の『蘇峰自伝』より。